

## 高野山周辺の御田―真国を中心に―

森 本 一 彦

### 一 高野山周辺の御田

「御田」や「御田植祭り」と呼ばれる行事が全国各地に残っている。高野山周辺にも、稲作の作業を演じる「御田」という行事が行われている。現在、御田は五か所に残されているが、以前はさらに多くの集落で演じられていた。高野山周辺の集落は、少子高齢化によって過疎化し、いわゆる「限界集落」と呼ばれる状況になっている。そのような状況の中で、多くの御田は消滅していった。

高野山周辺で御田が現存するのは、かつらぎ町天野の丹生都比売神社、かつらぎ町花園梁瀬、有田川町杉野原、有田川町久野原、紀美野町真国の五か所である（図1）。高野山周辺の御田は、旧正月に行われている。『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』（和歌山県教育委員会編 二〇二五）によれば、以前はこの五か所以外にも御田が行われていた。現在、かつらぎ町渋田では御田は行われていないが、『紀伊続風土記』の伊都郡志富田莊東志富田村の蟻通神社の項には「毎年正月十一日御田植といへる神事あり 神職禰宜あつまり田植えの状をなして米を蒔く参詣の人これを拾ひ十五日の粥に入れ食して年中の邪気を除くといふ」（仁井田 一九一〇）とある。

本稿では、高野山周辺の御田の事例として、紀美野町真国地区の真国丹生神社で行われている御田を紹介する。真国地区の御田は、地元住民に代わり、高校生が演者として継承しており、消滅する伝統文化の継承の形態として

注目すべきものである（鞍 二〇一四、小野田 二〇一五）。しかし、高校生たちは自分たちが継承することも重要であるが、地元住民たちに御田を演じて欲しいと考えている（小野田 二〇一五）。ただし、何度も継承が断絶しており、地元住民が行っていたものとは異なった形で演じられている。本稿は、地元住民が御田を行うために、どのような経過を経て現在に至っているのかを記録し、地元住民が行っていた戦前の形態を復元することを目指すものである。

## 二 真国地区の概要

真国地区は和歌山県海草郡旧美里町（現在、紀美野町）に属し、貴志川の支流の真国川流域に位置している。真国地区は北野・初生谷・花ノ原・養津呂・真国宮・養垣内・井堰の集落からなり、真国川と並行する高野街道沿いに点在している。山が真国川に迫り、全体的に平地が狭小であるため

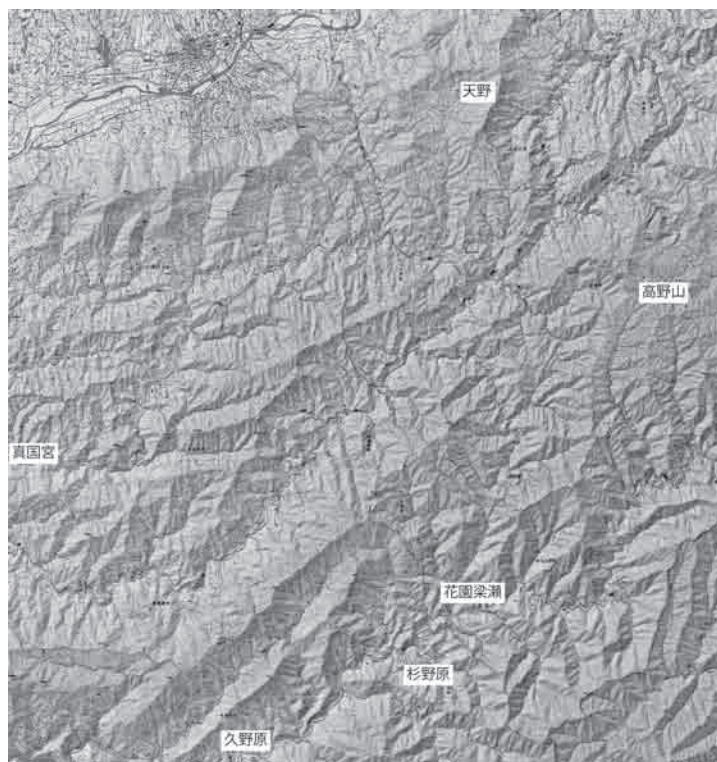


図1 高野山周辺の御田マップ

に、林業や畑作を中心としていたが、棚田や隠田も散在している。真国丹生神社が鎮座する真国宮は中心地であり、平地が開けており、水田が多く、集住して商店もあり、以前は製材所もあった。

真国荘は康治二年（一一四三）に鳥羽院を本家とし、藤原成通を領家とする荘園として成立し、その様子は神護寺所蔵「神野真国荘園絵図」に記されている。鎌倉時代初期には、神護寺領となったが、承久の乱（一二二一）後に高倉院の寄進によって高野山寺領となった。

### 三 真国御田の歴史

高野山周辺では、旧正月に行われる予祝儀礼としての稲作の芸能を、一般的に御田と呼ぶが、真国地区では「真国御田春鋤規式」を正式名称としている。この名称は、台本の表題に記されているところから使用されているようである。

地元の伝承では、真国の御田は六百年以上前に大阪の住吉大社から伝わったとされているが、それを示す記録は見られない。住吉大社の御田は、六月に行われており、実際に神田において苗を植えるものであり、そこで終わり、真国地区で行われている現在の御田とは異なっている。真国丹生神社の神主を務めていた高岡家文書（現在、和歌山県立博物館寄託、『和歌山県史』に中世文書翻刻、『美里町誌』に近世文書翻刻）にも御田に関する文書は見られない。真国丹生神社は近世前期の火災によって、記録類も消失しており、社務所にはそれ以降の近世・近代の古文書が保管されているが、現在のところ御田に関する記録は見られない。真国丹生神社文書には、文政七年（一八二四）九月の「氏神様江翁献上諸入用帳」が残されているが、これは真国丹生神社に天野川能大夫が翁舞を奉納した時の費用に関する記録である。

戦前は、真国丹生神社の氏子である北野・初生谷・花ノ原・蓑津呂・真国宮・蓑垣内・井堰の七集落が交代で御

田を演じていた。その際には、各集落で演者をそろえなければならなかったもので、演者の年齢はまちまちであったという。戦時中に徴兵のために、男性が少なくなり、御田が中断した。

戦前の記録としては、昭和一八年（一九三三）の森下信一「御田規式実記」（図2）があり、同年に撮影された演者の写真も残っている（図3）。新井恒易『農と田遊びの研究』（新井 一九八一）には、明治頃に仲谷浪之助が整理した台本が紹介されている。

道具としては、面（花賀之丞・福太郎・牛）、太鼓、ササラ、衣装、鍬（福太郎のものが花賀之丞のものに比べて短い）、鎌などがある。年代が分かるものとしては、牛の面がある。その内側に「紀元二千六百年記念」の文字が墨書されており、昭和一五年（一九四〇）の作成と考えられる（図4）。

戦後、御田が復活して少しの間は行われていたが、また中断したと言われる。昭和五六年（一九八一）発行の新井恒易『農と田遊びの研究』（新井 一九八一）には「今では中絶

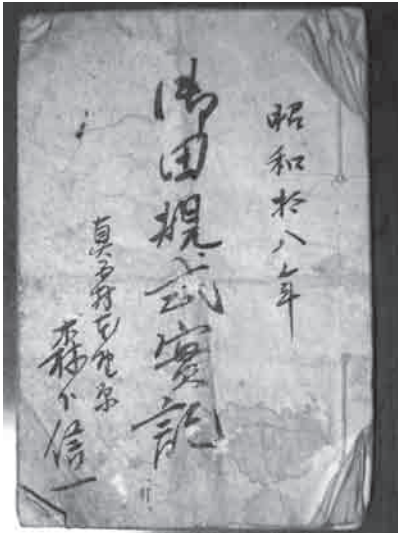


図2 森下信一「御田規式実記」



図3 昭和18年の御田（森下富夫氏蔵）

状態にある」と記されている。しかし、昭和五七年（一九八二）～昭和五八年（一九八二）に和歌山市民会館において行われた広域市町村圏郷土芸能競演会に真国の御田が出演しており、舞台の様子はりら創造芸術高等学校に保管されたビデオに記録されとともに、『真国御田春鍬規式』（真国御田の舞保存会編 一九九四）の口絵写真に使用されている（図5）。

その後、真国小学校において御田が復活しており、平成六年（一九九四）二月一九日に真国小学校体育館で小学五、六年生によって御田が演じられた。ただし、台詞や演技が難しいために、小学生向けに変更された。現在演じられている御田の動作は、その時の影響を受けている。平成六年（一九九四）七月～九月の世界リゾート博で御田が演じられたが、その後、途絶えたと言われている。

平成一九年（二〇〇七）に、休校となっていた真国小学校の校舎を使用して、りら創造芸術高等専修学校（平成二八年四月以降りら創造芸術高等学校）が開校した（山上 二〇一三）。平成二二年（二〇〇九）十一月二二日の第一回世界民族祭in紀美野の前夜祭において、一期生の卒業研究として御田が演じられ、さらに翌年二月三日の真国丹生神社の祭礼において御田が演



図4 牛の面の墨書



図5 広域市町村圏郷土芸能競演会

じられた。それ以降、真国丹生神社の氏子である七集落が祭礼を主催し、野上八幡宮宮司が祭祀を行い、りら創造芸術高等専修学校（当時）が御田を奉納している。

現在の御田は、明治期の台本をもとにしており、りら創造芸術高等専修学校（当時）に在籍していた海津由布子が、和歌山大学教授の海津一朗の指導の下に再現したものである（海津 二〇〇二）。平成二十一年に御田が復活してからは、りら創造芸術高等専修学校（当時）の生徒によって演じられてきたが、平成二八年（二〇一六）の御田では、地元の住民が牛役を演じ、地元住民の参加が実現した。

## 五 真国御田の概要

真国の御田は、旧正月七日に真国丹生神社で行われることになっているが、日程は氏子が話し合って決めるために事情によっては前後することがある。近年の開催日時は、平成二五年（二〇一三）は二月一六日一時、平成二六年（二〇一四）は二月六日一四時、平成二七年（二〇一五）二月二五日一時、平成二八（二〇一六）二月一四日は一一時、平成二九年（二〇一七）は二月二日一三時三〇分から行われた。

以前は舞殿で御田が演じられていたと言われるが、舞殿は取り壊されて現在はないために、本殿の前にある拝殿で演じられている。本殿に向かって左側の拝殿で御田が演じられ、右側に氏子や参観者が座る。拝殿の左後ろが楽屋として使用され、演者は本殿に向かって左手から出入りする。真国丹生神社の祭礼以外では、一〇月のりら創造芸術高等専修学校（当時）で開催されていた世界民族祭において演じられた。御田は神社で奉納される前提であるために簡易の鳥居を設営して演じられていた。平成二八年（二〇一六）の世界民族祭は、紀美野町文化センターで行われ、紀美野町も関わったこともあり、御田は演じられなかった。

御田の演者は、一〇月の世界民族祭に向けて夏までに、りら創造芸術高等専修学校（当時）の生徒によって決め



られ、練習が開始される。真国丹生神社で行う御田の主役である花賀之丞と福太郎の役は、世界民族祭と同じである。その他、早乙女や囃子はその都度変更された。

平成二六年（二〇一四年）は、一三時から氏子とりら創造芸術高等専修学校（当時）の生徒が、掃除や会場整備などの準備を行った。一三時五五分に区長が開式の辞を述べ、宮司が修祓、献饌、祝詞奏上を行い、玉串奉奠（神主・総代長・総代よりら創造芸術高等専修学校（当時）の校長・生徒代表主役二名）、撤饌をし、一四時〇八分に神主が礼をして祭典が終わった。

その後、会場を設営し直し、一四時一五分に御田が始まった（表1）。一四時四一分に終了する。その後、境内でりら創造芸術高等専修学校（当時）の創作ダンスと歌が披露された。氏子と生徒で会場の片づけを行った。御田の後に行われる催しは、毎年異なっている。

#### 昭和一八年の写真

以上のように、御田に住民が演者として参加するようになり、御田が地域に戻される方向が見出されてきたが、真国小学校やりら創造芸術高等専修学校（当時）で演じられてきた御田は地元住民で演じられたものとは変わっていることは明らかである。御田を地元住民に戻したいと考える時に、地元住民が演じていた御田とはどのようなものであったかのかを知っておく必要があろう。

今となつては、演じた経験のある住民はおらず、見聞した住民も幼少であったことから、戦後に行われた御田の様子は聞き取り調査によるだけでは分からない。また御田に関する歴史資料もほとんどない。そのために、周辺に残る御田との比較が必要となってくる。

伊藤信明（伊藤 二〇一三）は、高野山周辺に残る五か所（かつらぎ町天野の丹生都比売神社、かつらぎ町花園

表1 真国御田台詞・動作対応表（和歌山県教育委員会編 二〇一六）

現在の台本（春鍬規式の実記）	動作	森下信一『御田規式実記』
<p>（無言）</p>	<p>花賀の丞が先導し、福太郎が少し後ろに付いて右手で扇をおおきながら楽屋から出てきて、反時計回りで一周して楽屋へはける。</p> <p>鍬の風呂を上にして持つて、福太郎・花賀の丞の順に登場する。左側に花賀の丞、右側に福太郎が並ぶ。</p> <p>二人が向き合つて、一緒に口上を述べ、鍬の柄で地面を二回叩く。</p> <p>二人で台詞を言う。</p> <p>花賀の丞が台詞に合わせて方角を示すように開いたまま生手で切るように左右・中央に動かす。</p>	<p>へ参り候くくく世の中良ければ花賀の丞こそ参り候</p> <p>花賀の丞は 参り候が どの方が良き方と問候得ば 四角八方良き方と申す 先此の方に向ひて鍬初し候 のふ ヲ、</p>
<p>見参</p> <p>花・福…参り候。世の中がよければ花賀之丞こそ参り候。参り候 参り候。</p> <p>両…花賀之丞は、参り候が。どの方が、よき方と問ひ候へば、四角八方がよき事と申し。先すこの方に向ひて。鍬そめし候のう。</p> <p>福…のう、あー春鍬そよのこ。</p> <p>両…打ち出の小櫓。打ち出の小櫓。打ち出の小櫓。打ち出の小櫓。</p> <p>花…一の鍬を打つて、引き起こし。鼻に当て嗅いでみて候へば、かしかれ給ふ鍬ふりの、かさがほうがとし候のう。</p> <p>福…お、春鍬そよのこ。</p> <p>福…お、春鍬そよのこ。</p> <p>両…打ち出の小櫓（こつち）。打ち出の小櫓。打ち出の小櫓。打ち出の小櫓。</p> <p>福…二の鍬打つて引き起こし。鼻に嗅いで候へば、萬（よろず）悦びたれ。原太平四十万方の宝、当庄へ奉賀とし候のう。</p> <p>花…春鍬打ち候が。お祝いの牛呼び候。</p>	<p>二人が台詞に合わせて、体を斜めにして各々の右側を鍬で地面を掻く。</p> <p>花賀の丞が自身の右側の地面を鍬で引き起こすと同時に、右側に体をかがめて、手で土をすくい、鼻で嗅ぐ。</p> <p>二人が台詞に合わせて、体を斜めにして各々の右側の地面を鍬で掻く。</p> <p>福太郎が自身の右側の地面を鍬で引き起こすと同時に、右側に体をかがめて、手で土をすくい、鼻で嗅ぐ。</p> <p>二人が客に向き、花賀の丞の台詞が終わると、福太郎が楽屋に戻る。</p>	<p>へアー春鍬そよのこ</p> <p>へ打出の小櫓くくくく</p> <p>一の鍬を打つて引きし 鼻に当てかいで候へば、かしかれ給ふ 鍬ふれの かさが はうがとし候のふ ヲ、</p> <p>春鍬そよのこ へ打出の小櫓くく</p> <p>二の鍬打つて引きし 鼻に当て 嗅いで候へば 萬悦たり 原太平四十万方の宝 当庄へはらがとし候のふ ヲ、ア、春鍬そよのこ</p> <p>へ打出の小櫓くく</p> <p>春鍬を打ち候が 御祝の牛呼び候</p>
<p>牛使い</p> <p>花…是よりも西の国。うすぎのうちゅうどうから参るべきものは。千の牛、万のまる。千の牛、万のまる。是もお祝いで、三度呼ばねば参り候はぬ。是よりも西の国。うすぎのうちゅうどうから参るべきものは。千の牛、万のまる。牛をつかい候。此の処へ参るまじきものは。天下の悪事、内外（ないげ）の自由（じよう）。病むということ伏す</p>	<p>花賀之丞が正面を向いて一人で台詞を言う。「牛をつかい候」が言い終わるころに、福太郎が「ちよー」と言つて牛を操りながら、楽屋から出てくる。</p>	<p>是よりも西の国 うすぎの うちゅうどうから参るべき者は 千の牛 万のまるく 是も御祝で三度よはねば参り候はぬ</p> <p>是よりも西の国 うすぎのうちゅうどうから参るべき者は 千の牛 万のまる 牛使い候 此の所へ参るまじき者は 天下の悪事 内げのふじよ</p>

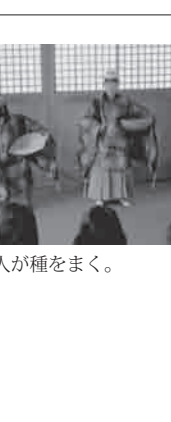


高野山周辺の御田一真国を中心に

肥さがし（肥まき）	畔はつり	牛使い
<p>福…お。肥持ち候が。五月はながら農と申し。多う作りしものも、少なく作りしものも。忙しうてけれ。殿原達の御用遊はす所へまかり出て、推参申さば、ほこるといふ。よしよし、ほこらばこれ、恩賞の向（し）して、こおくかいさへ。せられ候へば、肥は持ち候。えいやあーうん。さても福太郎は、力をほんに入れおかれ、重う候。この肥三荷（さんか）持たば、千町（せんぢょう）へさがすと。肥をさがし候。ぽーい、ぽーい。大家にも小家にも。豆米かわいたが、こえがねばうて。ぽーい、ぽーい。</p>	<p>花…苗代をならし候のう。</p> <p>花…おーぬんめら、なんたら、なんたら、なんたら、なんたら、なんたらと、肥持ち候のお。</p>	<p>という。他方世界左せい。此の処へ参るべきものは来い。萬悦びたれ。原太平、四十万方の宝は当庄へ右（ひょう）せい。牛をつかい候が、畔はつり候。お、春鍬そよのこ。</p> <p>福…お、春鍬そよのこ。お、春鍬そよのこ。</p> <p>花…畔をはつり候がお祝いの牛あげ候。牛あげ候。</p>
<p>福太郎が肥桶を担ぐ。</p> <p>福太郎が肥桶の肥を柄杓で撒いて回る。</p> <p>肥を撒き終わると、福太郎を先頭に、花賀之丞が衆屋に退く。</p>	<p>花賀之丞が台詞に合わせ、鍬の袋を立てて、左右に三回苗代を均す。</p> <p>花賀之丞の台詞の後、福太郎が肥桶を天秤棒で担いで登場し、花賀之丞の右側に来て、肥桶を置く。</p>	<p>福太郎と牛が、花賀之丞の左側に位置する。</p> <p>花賀之丞が台詞を言い終わると、鍬を地面に置き、福太郎から牛を受け取り、「ちよー、きょーせい」と言いながら牛を操って、時計回りに一周回つて元の位置に戻る。福太郎に牛を返して、鍬を持つ。</p> <p>花賀之丞の台詞が終わると、牛が「もー、もー」と暴れだし、福太郎が引きずられるようになり、「おー、おー」と言いながら綱で操ろうとする。牛が落ちて着くと、花賀之丞が衆屋に退き、福太郎が「ちよー」と言いながら牛を操りながら付いて行く。</p> <p>花賀之丞が鍬を持って一人で登場し、客に向いて台詞を言う。</p> <p>花賀之丞が台詞に合わせ、鍬の袋を立てて、左右に三回苗代を均す。</p>
<p>へ糞持候が 五月は長農と申し 多作の者も 少のふ作の者も 忙しうてければ 殿原達の御用遊はす所へ まかり出 推参申さば ほこるといふ よしくほこらば ほこれ 御じやうの向へとして こをくんかいさへせれば候へば 糞は持候 ハアゑいやらん 扱も福太郎殿は 力をほんに入れ置れ重候 此の糞三荷持たうば 千町へもさがすと。言ふ糞をさがし候。ぽーい、ぽーい。</p> <p>大家にも 小家にも 豆米に かはいたが 糞がねばうて ぽーい、ぽーい。</p>	<p>苗代をなつし候のふ</p> <p>へフ、へぬんめら、へなんざら、へなんざらと</p>	<p>苗代時には 水が冷て 上々に 牛が踊り候</p> <p>病むと言ふ事 ふすと。言ふ 多方世界左せい 此の所へ参るべき者は 万悦たり 原太平四十万方の宝当庄へ右せい 牛を使ひ候が 畦をはつり候</p> <p>ア、春鍬そよのこ、くく</p> <p>畦をはつり候が御悦の牛上候 牛上候が</p>

種時き	水口祭	苗代ならし
<p>花…花賀之丞、萬の事は忘れ候へども。我が内徳は忘れ候はぬ。先(ます)種立(たねたて)て戴(い)ただき候。種を蒔き候のう、おゝ。福太郎。</p> <p>花…ハア時いたり。</p> <p>福…福の種。</p> <p>福…さてはまた福の種。</p> <p>花…社塔へも福の種。</p>	<p>花…やんら田、のしり、花賀之丞が。社塔大伽藍(しゃとうだいがらん)の御前の仏法の種を、西方の手に。</p> <p>福…福しやりり、福しやりりんと。打ち蒔き、一束かい刈りて、ついほうついで御簀、十二合人りの御餅に、九石八斗(きゅうちくはつと)ばかり付かせたまうどやらん。水口祭り、御坊たちの数珠の緒、袈裟の緒。とんぶとんぶ。殿原達の大力。とんぶとんぶ。</p>	<p>花…苗代をならし候。のう福太郎。</p> <p>福…おゝぬんめら、なんだら、なんだら、なんだらと。</p> <p>福…水口祭の次第。</p>
<p>各々が自分の台詞に合わせて、交互に箕から種籾をつかんで右側の地面に播く。</p>	<p>花賀之丞が籾一本を持ち、福太郎が何も持たず登場し、右に花賀之丞、左に福太郎が客を向いて立つ。花賀之丞が福太郎に籾を渡す。</p> <p>福太郎の台詞に合わせて、二人同時に籾で左右に三回地面を均す。</p> <p>台詞の後、福太郎を先頭に花賀之丞が樂屋に退く。</p> <p>福太郎が米の入った三宝を三つ小さな板にのせて持つてくる。</p> <p>本殿の前の中央・右・左の三か所に三宝を置き、それぞれ座って拝む。正面に戻り、三宝をのせていた板を置き、客に向かつて立つ。そこに花賀之丞が籾と箕を持って、福太郎の左横にやつてくる。</p> <p>花賀之丞が福太郎に箕を渡し、台詞を言う。</p> <p>福太郎が箕を持つて種籾を播き、花賀之丞が籾で土を掛けながら、時計回りに回る。</p> <p>台詞が終わると、花賀之丞が先頭になり、二人が樂屋に退く。</p>	<p>苗代を揃し候。のふ、へぬんめら、へなんざら〜へなんざらと。</p> <p>へ水口祭の次第</p>
<p>花賀之丞は、萬の事は忘れ候へ共、我内徳は忘れ候はぬ。先づ種立戴き候。種を蒔き候のふ。</p> <p>へヨー、へ時たり</p> <p>へ福の種</p> <p>へ扱は又、へ福の種</p> <p>へ社頭へも、へ福の種</p>	<p>三所へ米をなへとなへ事</p> <p>へやんら田のしり、花賀之丞が、社頭大がらの御前な仏法の種を西方の手に、福舎羅利くと、打蒔き、や東、かい刈つて、ついほうをついでごらん、拾式合入の御餅に九石八斗ばかり、付せ給ふと、やらん、御坊達の数珠の緒、けさの緒とんぶく、殿原達の大力、とんぶく</p>	

高野山周辺の御田—真国を中心に

<p>苗代の見回り</p> <p>福：蒔いたり福の種。 花：さてはまた福の種。 福：大伽藍へも福の種。 花：蒔いたり福の種。 福：さてはまた福の種。 花：両大官（りようだかん）へも福の種。 福：蒔いたり福の種。 花：さてはまた福の種。 福：楽屋へも福の種。 花：蒔いたり福の種。 福：さてはまた福の種。 花：殿原達へも福の種。 福：蒔いたり福の種。 花：さてはまた福の種。 福：そとね福の種。 花：番頭達へも福の種。 福：蒔いたり福の種。 花：さてはまた福の種。 福：惣座（そうざ）へも福の種。 花：蒔いたり福の種。 福：さてはまた福の種。 花：祈誓上下（きせじょうげ）福の種。 福：旁（かたがた）へも福の種。 花：蒔いたり福の種。</p>	
<p>二人は箕を持ち、右手をかざして、時計回りに苗代を見て回る。</p> <p>花賀之丞が楽屋に退き、福太郎は見回りを続ける。</p>	 <p>福太郎が楽屋に向けて種粉を播く。</p> <p>二人が種をまく。</p>
<p>福：まだ、蒔いたり。種を播き候が。苗代を見廻り候のう。おゝ、姥（うば）らが申す事には、今年草木は吉。麦世の中もよからうし。麦おも搗（つ）き干さぬか。薙（むしろ）を打てというやーい、そのな、冬から湿置（しまめしい）たる。藁干把（わたくせんぱ）ばかりに、細縄取り添へて。早もってこい。金法師（かなぼうし）。ホウ、はや芽出して候。</p> <p>姥らが申す事には。今年は草木も吉。五月には雨も降ろふし。五月女たちに蓑（みの）おもひぬり</p>	<p>へまだ蒔たり 種を蒔き候が 苗代を見廻り候のふ へッ、へ、姥らが 申事には 今年 は 草木も吉 麦世の中も よからうし 麦をも つきぼさぬか むしろをも打てと 言ふ ヤイ そのな冬からしめ し置いたる わら干把ばかりに 細縄取ぞへて 早 ふ 持つてこい 金法師 へホウ／＼ へ早目出し て候</p> <p>姥らが 申事に 今年 は 草木も 吉し 五月は 雨も降ふし 五月女達に 蓑をもち</p>

舅・婿見参	苗代の見回り
<p>花.. 国々のトウドウ達は参り候。御祝の福太郎呼び候のう。</p> <p>花.. おー、福太郎やーい、福太郎やーい。</p> <p>花.. 是も御祝で、三度呼ばねは参り候はぬ。</p> <p>花.. 福太郎めやい。</p> <p>花.. おう。</p> <p>花.. さても福太郎殿は、声はすれ候へども、目には見え候はぬ。</p> <p>花.. 今度において地をもくぐり、天をも飛。はたとゆきあい、これぞ福太郎なれ。</p> <p>福.. 福太郎は福太郎と呼ばいて木の根元（つづ）れ。</p>	<p>て着せぬか。蓑をひねれという。ヤーイ、そこなる冬から湿置いたる笹み千把ばかりにすがりて取り添へて。早うもつてこい金法師。ホウホウ、早一葉になつて候。</p> <p>姥らが申す事に、今年は草木も吉。五月女たちに夏帷子（なつかたひら）織りて着せぬか。芋（お）をつめという。ヤーイ、そこな冬から湿置たる。継ぐそべそ。千も万も手つらう、津ほしに取り添へて。早うもつてこい金法師。ホウホウ、早植え丈になつて候が、国々のトウドウ達を諸事申（じよじもうし）。引っかけ植えさせ候のう。ほう、千人。東国千人。南国千人。西国千人。五千人のトウドウ、早々参れ。</p> <p>去年（こぞ）よりもや。今年は、世は吉しや。世は吉しや。早稲にはとうとく。中稲（なかつ）には数々。中稲には数々。中稲には数々。</p>
<p>花賀之丞が福太郎を連れて戻ってくる。途中で花賀之丞が、福太郎に手で先に行くように合図する。客と対面して立ち（花賀之丞が右、福太郎が左、台詞を言う。</p> <p>花賀之丞が右手で福太郎の肩を叩く</p> <p>花賀之丞が右手を頬に付けて、楽屋に向かつて福太郎を呼ぶ。</p> <p>花賀之丞が右手を頬に付けて、楽屋に向かつて福太郎を呼ぶ。</p> <p>楽屋から福太郎が返事をする。</p> <p>花賀之丞が楽屋に退く。</p>	<p>福太郎が、苗の様子を見るのに下を向く。</p> <p>節を付けて歌うように。</p> <p>福太郎が楽屋へ退く。</p> <p>花賀之丞が何も持たずに登場し、中央で客に正面して台詞を言う。</p> <p>花賀之丞が右手を頬に付けて、楽屋に向かつて福太郎を呼ぶ。</p> <p>花賀之丞が、右手の指を三本立て、その後手を左右に振る。</p> <p>花賀之丞が右手を頬に付けて、楽屋に向かつて福太郎を呼ぶ。</p> <p>楽屋から福太郎が返事をする。</p> <p>花賀之丞が楽屋に退く。</p>
<p>へ福太郎は福太郎と呼いで気の根はつづれ。</p>	<p>ひめつてきせぬか。蓑をひねれと言ふ。ヤイ、そこな冬からしめし置いたる笹み、千把ばかりにすがぞ取そへて。早う持て来い金法師。へホウくへ早一葉に成つて候。</p> <p>姥らが申すには、今年は草木も吉し。五月女達に夏帷子も、織りて着せぬか。麻をもつめと言ふ。ヤイ、そこな冬からしめし置いたる。続てべそ。千も万も手つらうつばしに。取そへて。早う持て来い金法師。へホウく、早植えに。成つて候が、国々の堂々達、諸事申し引かけ、植させ候のふ。へヲ、へ北の国。へ千人。東国。千人。西国。へ千人。へ五千人の堂々達。早々来れ。</p> <p>歌三度返し</p> <p>へことよりもや。今年は、世は吉や。世は吉や。早稲は、とうとく。中稲にはかずく。</p> <p>へ国々の党々達は、参り候が、御祝の福太郎呼び候のふ。</p> <p>へヲ、福太郎やい、是も御祝で、三度呼ばねは参り候はぬ。福太郎めやい、扱も。福太郎殿はこゑは知れ候へ共、同に見へ候はぬ。こんどに於て地をもくぐり天をも飛びはつたと行合。へ是と福太郎なれ。</p>



福太郎が双葉を見下ろす。

高野山周辺の御田一真国を中心に

苗取り	舅・婿見参	
<p>花..あれの尾に。渡りしは西の京の一の合い町に。福太郎こうのおこうのおと。何とのお庭の尾に渡らせたまう。こなたへざつと立上げんぞう申せうとなご呼ばん。左様に呼だら居りようか。あれ</p>	<p>舅殿(しゅうとどの)の木の根は禿れば禿れ。我らが木の根は更に禿れ申さず。さぞうにめでとう候。福太郎は違う候。 花..急ぎ候はぬ。 福..急ぎいわれは。隣りの藤太郎が申す事に。去来(いざ)山へ行こうという。榊のおうこを追突(おつとがし)。刃(やいば)の鎌を追取添(おつとりそえ)。よいこ俗(よこ)へぐしと突き立て。把刃(かい)りてはばいと投げ、ばいと投げ。隣の藤太郎が申す事にいざいのらという。ヤーけんにようも。なやととりあつて。(大きにくつて)ひつしこうで見て候へば。 花..シテ、その草がい程ありて候。 福..二連片重(いちれんかたしげ)にて候。五月は吉生ない。蜘蛛の柄にも蓑を着せ、よの子の手にも我が手にし。事の落着きが済み候へば。牛馬はさんさんにかいてお使い召され。 花..アーラけしきだかきなる婿殿や。色のざやうい男の鼻のわきにはあいがある。国々のトウドウ達の若衆思う。思うことはさんなれ。 福..さんなれとは何候ぞ。 花..木が三本立てば森と定める。人が三人寄れば京と定める。何ぞや福太郎めは。 福..目をとがめ候。目のめでたし謂われを語つてきさぞう。目一朱一朱。五朱六朱。拾目にいたるまで。壹千座を得ねば身はいおとがめ候。 花..福太郎を呼ぶすべ知り候はぬ。 おれらも知らぬ。知らざ教せよう。</p>	<p>福太郎が、両手で草の束を運ぶ仕草をする。 花賀之丞が、福太郎の言葉を否定するように、右手を左右に振る。</p>
<p>太鼓一名とササラ二名が登場し、太鼓一名とササラ一名が右手に、ササラ一名が左手に座る。 花賀之丞を先頭に、二人が登場する。</p>	<p>福太郎が、手を上にあげて指で数字を示す。 福太郎を先頭に、二人が案屋に退く。</p>	<div data-bbox="508 635 777 839" data-label="Image"> </div> <p>福太郎が山を指す。</p>
<p>あれの尾に。渡りしは。西の京の一の合町の福太郎こうのうく。何との御にはの尾に。渡らせ給ふこなたへ。ざうと立上げんぞ申せとなご呼ん。へさよに呼たら居られうか。あれの尾に渡りしは。西の京の一の合町の福太郎こうのうく。何との御にはの尾に渡らせ給ふ。こなた</p>	<p>へ舅殿の気の根はつぶさばつづれ。我等木の根を更につづれ申さず。へさそふに目出度候。福太郎は遅ふ候。 へ急ぎ候はぬ。へ急がぬ。いはれは。へ急がぬ。いはれは。隣の藤太郎が。申事に。いざ山へ行らと言ふ。榊のおこう。追突し。刃の鎌を追取そへ。よい小俗へぐしと突立て。かい刈つては。ばいととなげく。 隣の藤太郎が申事に。いざいのらと言ふ。アリヤけんによも。なやと。取集て。ひつしこうで見て候へば。 へシテ其の草がい程有つては。へ壹連片しげにて候。五月は吉生も無い。蜘蛛の柄にも蓑を着せ。よの子の手も。我が手にし。事の落着済候。つば。牛馬はさんさんに。飼つて。御使めされ。へアリヤけしき盛りの賀殿や。色のさ黒が男の鼻のわきには。愛がある。国に党々達は若しふ思ふ。へ思ふ事は。さんなれ。へさんなれとを。何といふ。へ木が三本立てば。森と定める。人が三人寄れば。京と定める。何とや。福太郎。目は目を。おとがめ候。へ目の目出度き。謂し語つて聞かそう。目は五朱。一朱五朱六朱拾目に至る迄一千座を得ねば。身は位を。とがめ候。へおれら福太郎。呼ぶすべ知り候はぬ。へおれらも知らぬ。へしと教よ。</p>	<p>へ舅殿の気の根はつぶさばつづれ。我等木の根を更につづれ申さず。へさそふに目出度候。福太郎は遅ふ候。 へ急ぎ候はぬ。へ急がぬ。いはれは。へ急がぬ。いはれは。隣の藤太郎が。申事に。いざ山へ行らと言ふ。榊のおこう。追突し。刃の鎌を追取そへ。よい小俗へぐしと突立て。かい刈つては。ばいととなげく。 隣の藤太郎が申事に。いざいのらと言ふ。アリヤけんによも。なやと。取集て。ひつしこうで見て候へば。 へシテ其の草がい程有つては。へ壹連片しげにて候。五月は吉生も無い。蜘蛛の柄にも蓑を着せ。よの子の手も。我が手にし。事の落着済候。つば。牛馬はさんさんに。飼つて。御使めされ。へアリヤけしき盛りの賀殿や。色のさ黒が男の鼻のわきには。愛がある。国に党々達は若しふ思ふ。へ思ふ事は。さんなれ。へさんなれとを。何といふ。へ木が三本立てば。森と定める。人が三人寄れば。京と定める。何とや。福太郎。目は目を。おとがめ候。へ目の目出度き。謂し語つて聞かそう。目は五朱。一朱五朱六朱拾目に至る迄一千座を得ねば。身は位を。とがめ候。へおれら福太郎。呼ぶすべ知り候はぬ。へおれらも知らぬ。へしと教よ。</p>

蔵入れ	稲刈り	田植え	苗取り
<p>花…社塔へも。</p> <p>福…徳千徳。</p> <p>花…さてはまた。</p> <p>福…徳千徳（とくせんどく）。</p> <p>花…参らしたり。</p> <p>福…数を取り候のう。のー。</p>	<p>花…稲を刈り候のう。おう。</p> <p>花…福…八尾原や 七原や しゃく田君（たきみ）の徳太郎が 田刈るようはや やんや 田刈るようはや やんや 八尾原や 七原や 田刈るようはや やんや 田刈るようはや やんや</p> <p>（二回繰り返す）</p>	<p>花…福…この御田をやー 尾根田に植えて 生作り、栄えたりや 栄えたりや この御田をとびの子を植えて この美生作り栄えたりや 栄えたりや。（三回繰り返す）</p>	<p>苗取り</p> <p>福…オウ。</p> <p>花…福…我が取る苗はようさいたりや ようさいたりや 三つ葉栄えたりや（三回繰り返す）。</p> <p>花…苗を取り候が。縄をなえ候のう。おね。縄をのてこそ。早う早う苗をも引連（ひきつれ）。</p> <p>福…早う早う。縄をのてこそ。早う早う。</p> <p>花…早う早う。苗をも引連。早う早う。ここに稲穂があつた。ほんにつみましよう。縄をのてこそ。</p> <p>福…早う早う。苗をの引連。引つかけ植えさせ候。</p>
<p>花賀之丞が左側の俵を持つて、右側の福太郎に渡し、福太郎が左側に積む。（以下繰り返す）</p>	<p>早乙女が楽屋に退く。</p> <p>花賀之丞の台詞が終わると、太鼓が鳴り、早乙女が稲束と鎌を持つて登場する。</p> <p>太鼓とササラの囃子で、二人が歌う。二人の前で早乙女が鎌で稲束を刈る。</p>	<p>早乙女が楽屋に退く。</p> <p>福太郎が台詞の最後を上げると、太鼓が鳴り、早乙女三名（世界民族祭は五名）が苗を持つて登場する。</p> <p>太鼓とササラの囃子で、二人が歌う。二人の前で早乙女が苗を植える。</p>	<p>二人が節を付けて歌う。</p>  <p>早乙女が田植えをする。</p>
<p>へ数を取り候のふ へヲ、へ参したり</p> <p>へ徳千統</p> <p>へ扱は又</p> <p>へ徳千統</p> <p>へ社頭へも</p>	<p>へ稲を刈り候のふ へヲ、</p> <p>稲刈歌</p> <p>へ八尾原や 七原や、しゃく田君の 徳太郎を 田を刈る様をやんやくく</p>	<p>田植歌</p> <p>此の御田をや やね田に植て 此の美生作り栄えたりやくく 此の御田をや 飛の子に植て 此の美生作り 栄えたりやくく</p>	<p>へざらと 立人 げんど申すなど呼ん</p> <p>へ今こそ身にましくたれば 苗を取候のふ ヲ、</p> <p>苗取歌（二度返す）</p> <p>へ我が取る苗は よふさいたりやく 三葉栄えたりやくく</p> <p>へ苗を取り候が 縄をなひ候 へヲ、へ縄をなふてこそ へ早ふく へ苗をも引連 へ早ふく へ縄をなふてこそ へ早ふく へ苗をも引連れ へ早ふく へ縄をなふてこそ へ早ふく へ苗をも引連れ へ早ふく へこにつみほが有る ほんに 摘み申さか 縄をなふてこそ へ早ふく へ苗をも引連 へ引かけ 植させ候</p>



高野山周辺の御田一真国を中心に

## 蔵入れ

福徳徳  
花参らしたり  
福徳十徳  
花さてはまた  
福徳千徳  
福大伽藍へも  
福徳十束  
花参らしたり  
花さてはまた  
福徳十徳  
花二人官へも  
福徳十徳  
花参らしたり  
福徳十徳  
花さてはまた  
福徳十徳  
花楽屋へも  
福徳十徳  
花参らしたり  
福徳十束  
花さてはまた  
福徳千徳  
花殿原達へも  
福徳十徳  
花参らしたり  
福徳十徳  
花さてはまた  
花祖師とね  
福徳千徳  
花番頭達へも  
福徳十徳  
花参らしたり



花賀之丞が福太郎に俵を渡す。

[illegible]



高野山周辺の御田—真国を中心に

梁瀬、有田川町杉野原、有田川町久野原、紀美野町真国）の御田の比較を試みている。日時、主役、その他の登場人物を一覧にしており（表2）、登場人物は異なっているが、台詞が類似していることを明らかにしている。

森下富夫家所蔵の昭和一八年（一九四三）の御田の写真（図3）には、現在は登場しないものが写っている。一つは、御幣を垂らした笠を被った幼女二名、もう一つは鼓である。

幼女たちは笠を被っているところから見ると、早乙女の可能性もあるが、父親と思しき男性の膝に乗っていることから、苗を植える所作をすることは難しいであろうと考えられる。昭和五七年（一九八二）と昭和五八年（一九八三）に和歌山市民会館において行われた広域市町村圏郷土芸能競演会のビデオにも、幼女が登場しているが、女性の膝に乗っており、何もしていない。また早乙女は別に登場している。

周辺の天野、梁瀬、杉野原、久野原でも早乙女が登場するが、五名程度おり、小学生が演じることになっている。現在は女子も出演するが、もとは男子だけで演じていたと言われている。

久野原の御田では、神社まで行列を組んで歩いていく。そ

表2 高野山周辺の御田（伊藤 2012）

	天野	梁瀬	杉野原	久野原	真国
日時	正月 第3日 曜日（もと正月14日）	隔年2月11日に近い日曜日（もと旧暦正月8日）	隔年2月11日（もと旧暦正月6日）	隔年2月11日（もと旧暦正月9日）	旧暦正月7日
主役	田人（面） 牛飼（面）	黒しらげ（舅） 福太郎（髯）	舅 髯	舅 髯	花賀之丞（舅・面） 福太郎（髯・面）
その他の登場人物	田づ女（面） 礼の坊（面） 早乙女（女児） 一石（牛）	白しらげ（百々丞） 百太郎（脇鞆） 徳太郎（尻鞆） おんなり持ち（女装男子） 田植子（男子） 牛	田刈り 田植子 牛	稚児（男児） 牛	早乙女 牛

の時に、御田の演者とともに、その年に生まれた幼児が母親に抱かれ、行列に参加する(図6)。神社に着くとお祓いをしてもらう。『紀伊名所図会』(高市志友他著 一九九六)にも母親に抱かれた幼児が行列を組んで神社に向かう場面が画かれている(図7)。これは宮入儀礼と考えられる。

真国の御田に登場する幼女も宮入であつたのかも知れない。ただし、宮入であるとなると、たまたま幼女二名であつたのかという疑問は残る。また周辺地域の早乙女が被る笠は、梁瀬の場合は御幣のような形式であるが、他の地域では御幣のような切れ目や折り目はなく、細長い紙はストレートである。父親に抱かれていることや、御幣のついた笠を被っていることから見ると、幼女は神聖な存在であつたと考えられる。昭和一八年の写真では抱えている父親も袴を着ていることから考えると、当屋的な存在であり、父親が後見人の役割を果たしていたのではないかと考えられる。

また、昭和一八年の御田の写真には、鍬や鎌などの道具とともに、鼓が写っている(図3)。現在の真国の御田には、鼓は使用されていない。真国丹生神社の社務所には、鼓が保管されている(図8)が、住民はそれを使用したのを見たことがなく、使用方法は不



図6 久野原御田



図7 久野原御田(『紀伊名所図会』)

明である。かつらぎ町花園梁瀬の御田においては、種下しの時に鼓の上に種粉の入った器を乗せて、演者の前に差し出す（図9）。その後、演者が器を持って、舞いながら種粉を蒔く。昭和一八年の写真に、鼓が写っていたことから、真国でも梁瀬と同様に使用されていた可能性もある。

#### 今後の課題

本稿では、昭和一八年の真国御田の写真に注目して、現在は登場しない幼女と鼓について周辺の御田の比較から過去の御田の状況を推測した。

御田の台本について、りら

創造芸術高等専修学校（当時）の納豆調査では「有田川町杉野原の御田の台本には「山寺の小坊様 好物ハ何々 一に味噌 二に納豆 三に平餅」（清水町誌編集委員会 一九八二・八五二）とあり、かつらぎ町花園中南の御田の台本には「山寺のおもたち（小坊達）、こーのみのもの（好物）はなににない。一にみそ（味噌）、



図8 真国丹生神社の鼓



図9 花園梁瀬御田

二になつと（納豆）、三にもち（餅）（新井 一九八一・二八三）とある。また、有田川町粟生の堂徒式の膳には煮豆がのせられている。今回調査できなかったが、真国川流域の周辺にあたる旧清水町や旧花園村などにも納豆文化があった可能性が考えられる。」（坂口・小野田・柴田・鞍 二〇一五）という指摘がなされている。

御田の台詞をめぐる解釈は、現存する御田だけではなく、消滅した御田の台本についても比較検討する必要があるが、今後の課題としたい。

本稿では、真国地区を中心に、高野山周辺の御田の現状を紹介した。地域社会の少子高齢化とともに、祭礼の担い手は少なくなり、その維持は難しくなりつつある。

その中で、真国では、りら創造芸術高等学校（現在）が教育の一環として御田の担い手となっている。御田の担い手となり得たことを、単なる美談として語るだけでは十分ではない。りら創造芸術高等学校（現在）が芸術の学校であり、能などの伝統芸能が必修化されており、俳優を目指す生徒もいるという偶然はあるにしろ、それだけでは御田の担い手にはなりえなかったであろう。

りら創造芸術高等専修学校（当時）が開校するにあたっては、地域の反対もあった。しかし、開校当時、真国丹生神社の境内にあつた建物を寮として使用するとともに、神社の清掃を行うなど、地域住民と交流する中で、地域住民の中からも生徒たちによる御田の復活の要望が出てきたのである。

本稿は、住民が行っていた御田の形態を復元することが目的であるため、住民と生徒の交流については触れなかった。しかし、高校生が伝統的な祭礼の担い手になっているという事例をあげて、それを安易に模倣されることを危惧するために、あえて述べておく。



【参考文献】

- 新井恒易 一九八一 『農と田遊びの研究』 明治書院
- 伊藤信明 二〇一二 「高野山周辺の御田植え神事」『和歌山県立文書館だより』 第三三号
- 小野田円香 二〇一五 「女子高生が考えた伝統芸能を伝える意味—「さびしさ」に浮かび上げる地域の現在—」『わかやま住民と自治』 第二六八号
- 海津由布子 二〇一一 「地域と歩む祭り——真国御田から見る地域芸能」『和歌山地方史研究』 六〇号
- 鞍雄介 二〇一四 「地域を耕す 真国御田の舞の復活を通して学んだ地域と学校の新しい関係」『わかやま住民と自治』 第二五六号
- 坂口悠・小野田円香・柴田華帆・鞍雄介 二〇一五 「真国川流域の納豆文化」『高野文化圏研究会報告書』 (二〇一四年)
- 清水町誌編集委員会編 一九八二 『清水町誌』 資料編、清水町
- 高市志友他著 一九九六 『紀伊名所図会』 臨川書店
- 仁井田好古 一九一〇 『紀伊続風土記』 第二輯 伊都郡・在田郡・日高郡・牟婁郡、巖南堂書店
- 真国御田の舞保存会編 一九九四 『真国御田春鍬規式』
- 美里町史編纂委員会編 二〇〇七 『美里町史』 近世史料Ⅰ、紀美野町
- 森下信一 一九三三 『御田規式実記』 (森下富夫氏所蔵)
- 山上範子 二〇一三 「過疎化が進む山里を変えた。廃校舎活用モデルに 小さな創造芸術学校「りら」の挑戦」『わかやま住民と自治』 第二五四号
- 和歌山県立博物館編 二〇一一 『中世の村を歩く—紀美野町の歴史と文化』 和歌山県立博物館

和歌山県教育委員会編 二〇一五 『高野山周辺民俗文化財調査報告書』 和歌山県教育委員会  
和歌山県史編さん委員会編 一九八三 『和歌山県史』 中世史料二、和歌山県